

研究・調査報告書

報告書番号	担当
208	滋賀医科大学社会医学講座福祉保健医学部門
題名 (原題/訳)	
Characterizing alcohol dependence: transitions during young and middle adulthood. アルコール依存症の特性：若年者から中年者への変遷	
執筆者	
Kristina M. Jackson, Susan E. O'Neil, and Kenneth J. Sher	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Experimental and Clinical Psychopharmacology 2006;228-44.	
キーワード	
アルコール依存症、変遷、安定性、発達	
要 旨	
<p>(目的)</p> <p>アルコール依存症は比較的持続し、慢性になりやすいことが地域住民ベースの研究やハイリスク集団を対象にした研究により示唆されている。一方で、アルコール依存症は年齢と逆相関を示し、成人早期にピークを迎えその後減少することが疫学研究では示されている。潜在的なアルコール依存症の軌跡構造を a) 症状により特性があるか否か、さらに、b) どのような症状が同じ状態で持続するか否か検討した。</p> <p>(方法)</p> <p>National Longitudinal Survey of Youth 研究 の現在飲酒者 4,003 人を対象に、1989 年(24-32 歳)と 1994 年 (29-37 歳) のデータを検討した。アルコール依存症の程度を 3 段階にわけて検討した。</p> <p>(結果)</p> <p>結果、重症例になるほど症状の自覚が高まっていた。変遷の検討では高率で依存症状が同じ状態で持続していることが分かり、アルコール依存症が比較的慢性的な状態であることが示された。依存症は進行しやすいといわれていたが、むしろ改善している者の方が多かった。症状の変遷の傾向は、人種や性別にかかわらず同様であった、また、年齢別集団、アルコール依存の家族歴をもつ集団においてもある程度、同様に認められた。</p>	